



TITLE:

アメリカ合州国における林業と環境保全運動 (2) : 雑誌"Garden and Forest"とその関係者たち

AUTHOR(S):

伊藤, 太一

CITATION:

伊藤, 太一. アメリカ合州国における林業と環境保全運動 (2) : 雑誌 "Garden and Forest" とその関係者たち. 京都大学農学部演習林報告 1990, 62: 248-260

ISSUE DATE:

1990-12-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/191964>

RIGHT:

アメリカ合州国における林業と環境保全運動（2）

— 雑誌 "Garden and Forest" とその関係者たち —

伊藤 太一

Forestry and Conservation Movement in the United States (2)

— "Garden and Forest" Magazine and the Contributors —

Taiichi Iro

要 旨

19世紀末のアメリカにおける環境問題の顕在化は環境保全の専門分野としての林業と造園の確立を促した。その理論的運動の一翼を担ったのが "Garden and Forest" という雑誌とその関係者たちであった。それまでの林業とは、無尽蔵の森林から木を伐るだけの業であり、造園とは園芸や家の回りの修景でしかなく、裕福な人々の関心は珍奇な植物の収集に向けられていた。そこから環境と言う広大な空間の保全への関心を高め、自然公園や都市の緑地計画へ向かう理論づけがなされるようになることに、この雑誌の関係者たちはその論説などを通じて大いに貢献した。

1. は じ め に

前回¹⁾、環境保全のための林業の実践の場としてのビルトモア (Biltmore) の役割、ピンショー (Gifford Pinchot) とオルムステッド (Frederick Law Olmsted, Sr.) の関係、林業教育などについて論じた。本論では、環境保全思想を広める手段として雑誌に現れた論説やその関係者の活動から、林業と造園の理論的な発展について考察する。ここでもアメリカにおける科学的林業の確立者であるファーノウ (Bernhard E. Fernow) や近代造園の父と言われるオルムステッドが大きな役割を演じている。プラントハンターが新種を求めて世界を探検したのは金持ちの道楽であったが、単なる珍種への関心から次第に環境に対する意識へ目覚めていく過程が、この保全思想の高まりと相関がある。

ビルトモアでのプロジェクトがノースカロライナ州のアッシュビル (Asheville) で進められていたのと同時期の1888年に、"Garden and Forest" という雑誌がニューヨークで発刊された (図-1)。その発行責任者はハーバード大学教授で、アーノルド樹木園 (Arnold Arboretum) の園長としてアメリカの樹木学の中心的人物であったサージェント (Charles S. Sargent, 図-2) であった。「庭と森林」というタイトル自体からも、2つの異質の空間を扱っているように感じさせるが、その副題が「園芸と造園芸術、林業 (Horticulture, Landscape Art and Forestry)」とあるように、植物という共通項があるとはいえ、今日の観点からすれば、対象が非常に幅広く、その購読者は東部を中心とする裕福な知識人階層であったと考えられる。

この創刊の理由として、森林の枯渇という危機感が横たわっている一方、経済的ゆとりの発生

GARDEN AND FOREST

A JOURNAL OF
HORTICULTURE, LANDSCAPE ART AND FORESTRY

Conducted by
CHARLES S. SARGENT
Director of the Arnold Arboretum, Professor of Arboriculture in Harvard College, etc.

ILLUSTRATED

VOLUME I. FEBRUARY TO DECEMBER, 1888

New York
THE GARDEN AND FOREST PUBLISHING CO.
1888

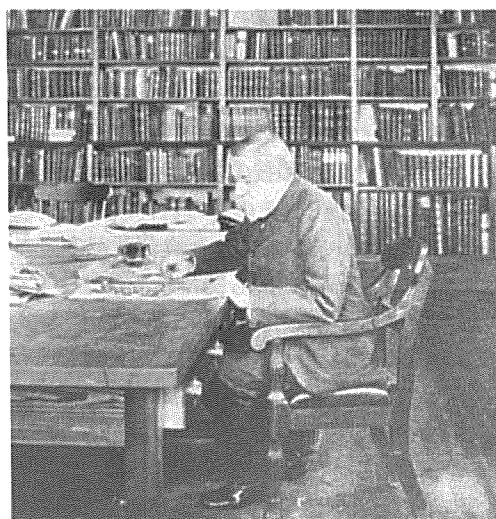


図-1 "Garden and Forest" 第1巻 (1888)

図-2 チャールズ・サージェント (1900)

による園芸や外来樹種への関心などがあったことが考えられる。本論ではアメリカでの環境保全史におけるこの雑誌の意義を明らかにするとともに、この雑誌に関わった人々の活動やその掲載記事を通じて、樹木や造園に関する関心がどのように環境へと拡大し、理論づけられ、さらに専門家が育成されるようになったのか探る。

2. サージェント (1841-1927) とアーノルド樹木園

まず、この雑誌の責任者であったサージェントについて概略を記す²⁾。彼は1841年4月24日ボストンの裕福な家庭に生まれた。父親 (Ignatius Sargent) は成功した銀行家であるだけでなく、園芸マニアでもあった。サージェント家はボストン郊外のジャマイカ池のほとりに大邸宅を構えていた。さらに、甥 (Henry Winthrop Sargent) のニューヨークの邸宅には、その隣人かつ親友の造園家ダウニング (Andrew Jackson Downing) がデザインした庭園があり、サージェント一家もしばしば訪れていた。

このように恵まれた環境に育った彼は、1862年にハーバード大学を辛うじて卒業後、軍隊生活を体験してから、ヨーロッパで3年間を過ごした。1868年にボストンに戻ってからは、自宅の130エーカー (52.6ha) におよぶ敷地の造園管理を仕事とした。これが職業と呼べるものであるとすれば、彼は造園家となったことになる。この敷地の広大さは庭園だけではなく公園スケールの視点で空間を把握する能力を彼に与えたとも考えられる。

次第に植物への関心が高まり、当時の高名な植物学者で、ハーバード植物園 (Harvard Botanic Garden) の園長グレイ (Asa Gray) に個人的に師事した。さらに1864年に出版されたマーシュ (George Perkins Marsh) の "Man and Nature" を読んで感動し、環境保全へ視野が広がった。彼の師グレイとマーシュは親交があった上、サージェントは3年にわたるヨーロッパ遊学中

に、マーシュがこの本を書くことを思い立った地中海なども訪れ、この本の中で指摘されている文明による植生の衰退を実感していたのであろう。

1873年には、引退するグレイを引き継ぐ形で、ハーバード植物園と新たに設置されたアーノルド樹木園の園長に任命された。その後、終身この地位に留まった彼は、植物学者のネットワークを築き上げ、ここをアメリカの樹木学研究の中心とした。サージェントは、当時の森林に関する第一人者として、1880年に行われた第10回国勢調査の森林部門の責任者に任命された。さらに1884年に公表された「北米の森林に関するレポート (Report on the Forests of North America)」は森林研究者としての彼の名声を確固たるものにした。彼はその中で伐採の問題に触れ、森林の資源の枯渇を警告し、その後の森林政策に大きな影響を及ぼした。

また、1883年からニューヨーク州北部のアディロンダック (Adirondack) 山の森林と水源の管理を州に求める運動にも関わるようになっていた^{3,4)}。1885年にアディロンダック州立保護林が設立された際に、彼はその森林委員会の長に任命された。さらに1881年から85年にかけては自然史博物館のアメリカの樹木の展示品の収集も引き受けている。

40代半ばを迎え最も充実している時期の1887年に、“Garden and Forest”の編集が始まった。この雑誌を出版している期間中にも、1891年から「北米の樹木 (Silva of North America)」の監修をおこない、1902年に完成させた。この全14巻はその後、関係者の必携書となった。さらに、1905年には「北米の樹木マニュアル (Manual of Trees of North America)」を出版している。また、1892年にはフロラの多様な日本を訪れている。雑誌の廃刊の前年の1896年には、森林政策を検討する国立科学アカデミーの森林委員会 (Forest Commission) の長として西部の森林の実情を視察した結果、13ヶ所の保護林の設定を諮問し、後の国有林となる地域の設定にも関与した。このように彼の活動が最も充実していた時期と雑誌の発刊されていた期間は重なっている。

サージェントは1927年3月22日にアーノルド樹木園の園長として在職のまま没した。彼は頑固で難しい人間であったと言われている。そのことは彼が編集した雑誌からも感じられる。しかし、着実に仕事を組織・推進する能力に関しては、10年間にわたるこの雑誌の編集に加え、樹木園の整備や長大な植物図鑑の監修などの業績からも明らかである。

彼が半世紀以上にわたって園長として活動の根拠地としたこの樹木園は、プラントハンターを世界に送りだし、北米における植物研究や園芸ブームの中心となったことで有名であるが⁵⁾、その敷地のデザインやボストンの緑地系統の中での公園的位置付けなどの点で、造園史においても重要な意義を持つ。その敷地計画にはニューヨークのセントラルパークの設計で知られるオルムステッドが協力している⁶⁾。

この敷地は元来130エーカーの面積を有する農場で、サージェント家の邸宅にも近かった。この農地はその裕福な所有者の遺言により、1872年にハーバード大学に正式に寄贈された。ボストン市街が望める丘や湿地等を含む変化に富んだ土地であったが、その当時は全体が荒れ果てていた。サージェントは初代園長として、この広大な敷地を整備して、生育可能なあらゆる種類の植物を、自生であるか外来であるかにとらわれずに育てたいと思った。しかし、それを実現するためには予算が限られているという現実的な問題に突き当たった。その際の彼の発想の注目すべき点は、彼は植物学者と造園家の2つの視点も持ち合わせていたということである。

1874年6月にボストンの公園に関する公聴会が開催されるのを機に、彼はすでに著名な造園家として、近隣のブルックライン (Brookline) に事務所を構えていたオルムステッドに手紙を書いた。その中で、この130エーカーの樹木園の敷地を公園として、ボストン市に相当の予算を投じて管理してもらう一方、植栽に関しては自分に任せてもらうようにできないものか相談をもち

かけている。これに対してオルムステッドは公園と樹木園の要求が同時に満たせるだろうかと疑問を投げかけながら、自分がデザインするよりも、サージェントが彼のアドバイスによって自らデザインすることを提案している。このようにオルムステッドは当初、サージェントの提案に否定的であった。しかしながら、彼は次第に熱中し、ついにその仕事を無償で引き受け、1878年の夏をほとんどその計画の立案に費やすほどになった。

その敷地計画（図-3）は一見単純に見えるが、外国産のものを多数含むさまざまな形態・色彩の樹木を植物学的に配置しつつ、ここの地形等の特色を生かして、公園に要求される調和のとれた景観を造り出すという過程はかなり困難であった。だが、この科学と風致の結合と言う難問があったからこそ、オルムステッドとサージェントは熱中したのであろう。100年以上を経た今日（図-4）でも当初の状態がそのまま維持されている事実は、当時の計画の完成度の高さの証拠と言えよう。

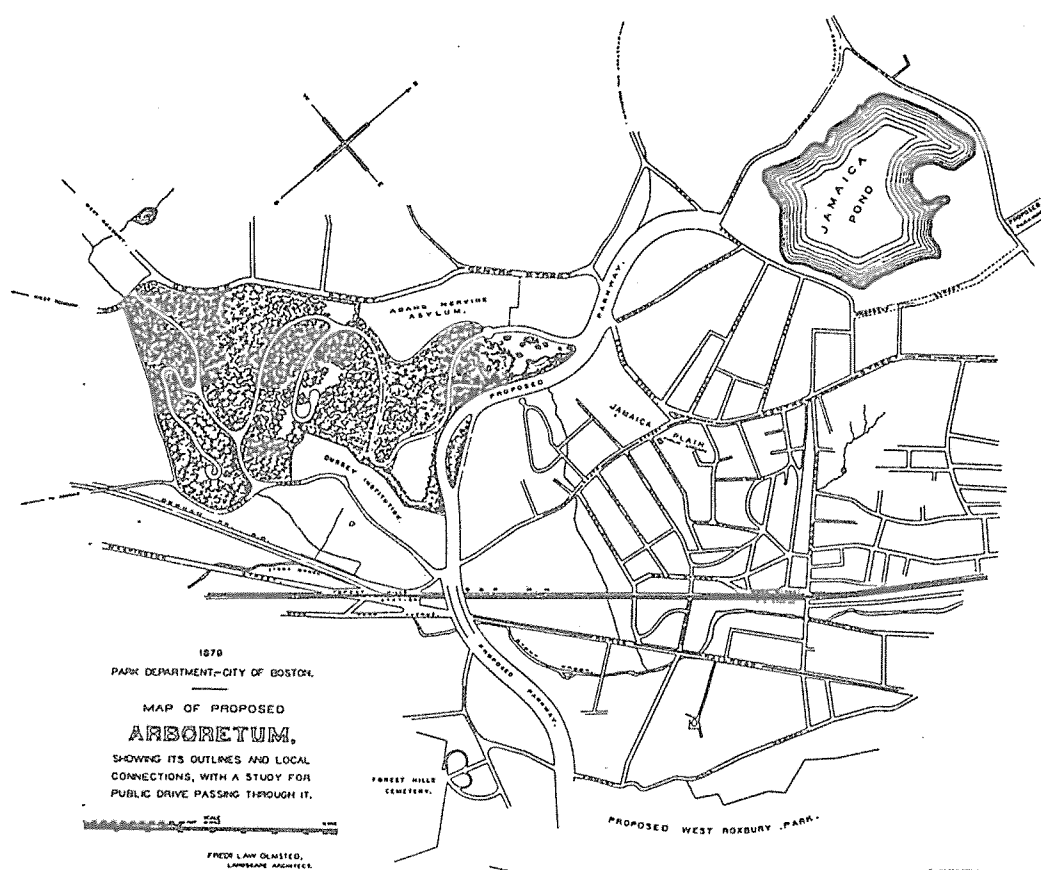


図-3 アーノルド樹木園（1879）

1882年にはこの樹木園をボストンの公園システムの一つとして管理するための合意書がハーバード大学とボストン市との間で取り交わされた。その内容はサージェントが8年前に望んだものに近かった。すなわち、ボストン市がこの敷地をハーバード大学から一旦購入し、1000年契約でハーバードにリースするという内容で、その施設等の管理は市当局が行なうことになっていた。この

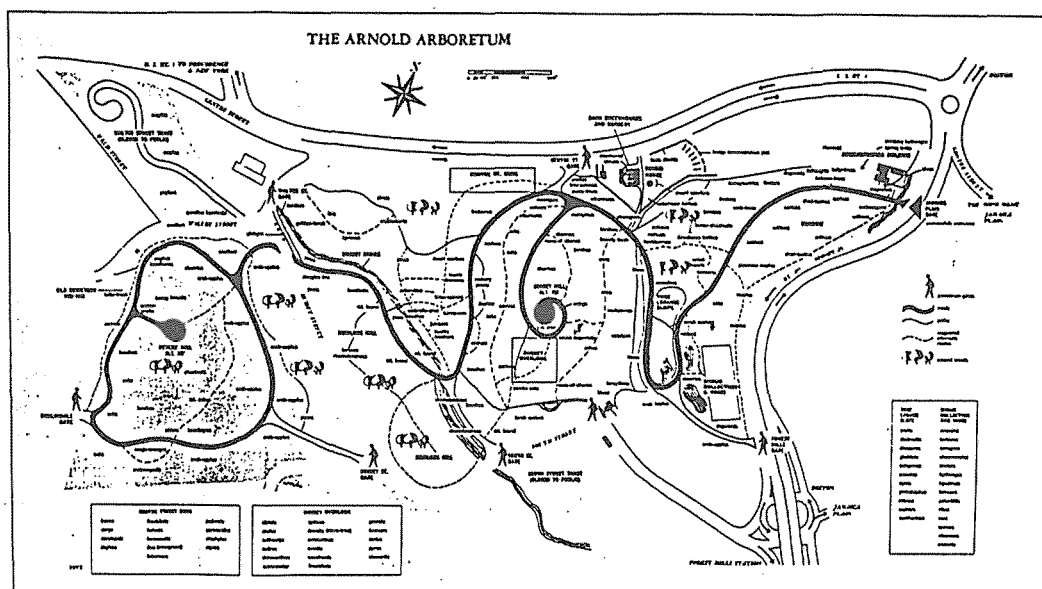


図-4 アーノルド樹木園 (1975)

際、隣接地もボストン市によって購入され、現在は265エーカーとなっている。このようにしてアーノルド樹木園は北米の樹木学の中心となる基礎ができ上がるとともに、ボストン地域の市民の憩いの場としても提供されることが約束された。換言すれば、アーノルド樹木園は、世界の植物を栽培しただけの空間ではなく、オルムステッドが計画したエメラルドネックレスと呼ばれるボストンの緑地系統に組み込まれた公園(図-5)として、また、さまざまな植物情報の発信地として、多くの人々に関わる場として機能した。

3. "Garden and Forest" の概要⁷⁾

"Garden and Forest" は、サージェントとオルムステッドが共同設立者となって、1888年の2月29日から週刊誌として発刊された。この2人は、アーノルド樹木園の仕事を通じて、既に親しくなっていた。また、その頃にはサージェントの甥のコッドマン(Henry Sargent Codman)がオルムステッドの事務所で働いていた。にもかかわらずオルムステッドが雑誌の責任者に加わらなかった理由としては、先ず造園設計事務所の仕事が大変忙しくなっていたことがあげられる。ビルトモアの計画が始まったのもこの年である。また、彼自身が既に60代半ばを過ぎ、限界を感じていたことも明らかだ。

そこで、刊行責任者(conductor)は一貫してサージェントが務めた。だが、実質的編集者はジャーナリストのスタイルズ(William A. Stiles)であった。各号の最初に掲載された編集者によるエッセイは彼が中心となり、時には関係者が交代で、担当していたと思われる。発刊のための資金はオルムステッドのクライアントでもある富豪たちが提供していた。

この週刊誌の構成は、編集者のエッセイ、植物の紹介、連載記事、読者からの通信、文献の紹

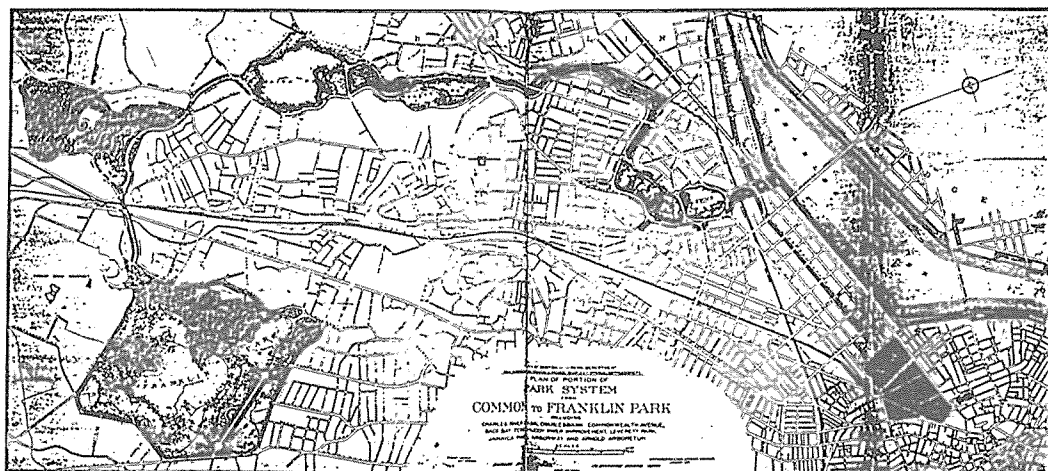


図-5 エメラルドネックレス (1896)

介、ニュース的情報を盛り込んだノートなどからなっている。「庭と森林」というタイトルがついているが、ページ数の多くを占めていたのは新種などの紹介である。これはサージェントの専門の影響を考えれば当然と言えるが、むしろ編集者のエッセイや読者からの通信などに当時の環境にかかわる問題に関する情報が多く盛り込まれていることが注目に値する。その中にはオルムステッドとその弟子たち、特にその一人で専門職としての造園の確立に貢献したが、若くしてなくなったエリオット (Charles Eliot) が頻繁に投稿していた。森林に関しては、ドイツからの移民で連邦政府の森林部門主任やコーネル大学の林学部長を歴任し、アメリカ・カナダの林業、林学を確立したファーノウと、その後継者とも言えるピンショー、さらには彼らの師ブランディス (Dietrich Brandis) やビルトモア森林学校のシェンク (Carl Alwin Schenk) も投稿している。

このように黎明期の造園や林業の代表的な専門家たちを執筆者に加えて、かなり質の高い内容を維持しながら刊行されたが、丁度10年目の1897年末をもって廃刊となった。その巻末の廃刊の辞⁹⁾には以下のように記されている。「第10巻が完結する本号をもち、"Garden and Forest"の出版は終了する。10年間、園芸と森林に関する週刊誌を刊行する試みが、商業的影響を受けず最良を目指して行なわれた。この実験は多くの時間と費用を要したが、結果としてアメリカ合州国にはこのような雑誌の出版を支えるほど、その記事に関心を持つ人々がいなかったことが判明した。財政的に成功せず遅かれ早かれ消え去る雑誌の刊行にこれ以上の時間と金を費やすことは無益である。」このように商業的に失敗であったのは、内容の質の高さの代償として、かなり専門的になり、一般の読者の関心を引く記事が少なかったことがあげられる。遥か以前の1841年に出版されたダウニングの造園に関する書物 "A Treatise on the Theory and Practice of Landscape Gardening Adapted to North America" が何度も版を重ねて、ベストセラーとなっていることから伺えるように、その頃にはアメリカの大衆の園芸や庭園に対する関心はかなり高まっていた。しかし、この雑誌はそのような自宅の周囲の修景のための実用的知識を求める大衆を読者として想定していなかったため、購読者が限定されたのであろう。逆に、大衆の要求に迎合しなかった故に、質の高い内容を保持することができたとも言える。

財政難に加えて、この雑誌の協力者のうち、オルムステッドの事務所の実務の中心を担ってい

たコッドマンが1893年に虫垂炎で死に、オルムステッド自身も1895年には引退した。その上、追い打ちをかけるように、エリオットも1897年3月に、過労が原因と思われる脳膜炎で急逝した。このように発刊の中心的人物が短期間に次々と抜けたことにより雑誌の継続は一層困難になったと推察される。それにとどめを刺したのは1897年10月6日の編集者スタイルズの死であった⁹⁾。

この雑誌の評価は発行部数等の事業的な視点よりも、アメリカの社会の中で、造園や林業が環境保全に関わる分野として位置付けられることに貢献したという点からなされるべきである。このことは知的エリートと大衆の関心の遊離を露呈する結果ともなっている。この時期は、造園に関しては、庭園職人が裕福な人々の庭を対象とする“landscape gardening”から人間と自然環境の調和を扱う専門家としての“landscape architecture”への移行の段階とも言える。一方、森林に関しては、環境の保全を目的として公有林が設定され、管理組織が整備されていく段階に重なる。このため、大衆はこの急激な変化の中で方向が掴めなかったのかもしれない。

だが、この雑誌の廃刊の直後に造園や林業の専門家の協会が設立され、機関誌が発刊されているところから、“Garden and Forest”は専門への分化過程のたたき台の役割を果たしたと考えられる。

4. 雑誌への投稿者たちとその活動

この雑誌の中では植物の紹介等に加えて、当時の環境に関わるさまざまな問題がよく論じられている。例えば、ヨセミテ州立公園の私物化問題、セントラルパークの問題、アディロンダック山の保全、1893年のシカゴの世界博覧会の紹介、職業としての造園家や林業家の役割についてなどがその例としてあげられる。以下雑誌にこれらの問題を提起した人々の活動を探ってみる。

1) オルムステッド (1822-1903)

オルムステッド自身はほとんど論説を寄せてはいないが、彼の事務所の所員たちが時折投稿している。数少ないオルムステッドの論説の一つに、植物材料の選択に関したものが見られる。その中で、自生の植物を主体にデザインはするべきであるが、外国産のものも、周囲との調和が保てれば排除するべきでないという意見を表明している。¹⁰⁾

オルムステッドが、この雑誌に望んだことは造園家の専門職としての社会的認識であった。彼は1863年には、庭師を連想させる“landscape gardener”に対して、“landscape architect”と自称していた。しかしながら、この雑誌の中では“landscape art”や“landscape gardening”ということばのみが用いられ、“landscape architecture”は全く出てこない。ここにも社会における造園認識とオルムステッドらの目指した造園家の評価とのジレンマが読み取れる。

オルムステッドの支持者で美術史家のレンセラー夫人 (Mrs. Mariana G. Van Rensselaer) が世界の庭園の連載記事¹¹⁾を掲載したことから、造園家志望の若者がオルムステッドの事務所で働くことを希望するようになった。彼はそういう若者を心から歓迎する一方、庭や花など美しさだけに関心を抱いている人間は造園家として必要ないと断言している。彼は美しさだけではなく、社会的視野を持っていることを造園家志望者に望んでいた。

亡くなった弟の息子で、義理の息子となったチャールズ (John Charles Olmsted) は、得意な構造物の施工等の技術解説記事を何度か投稿している¹²⁾。当時実子のフレデリック (Frederick Law Olmsted, Jr.) はまだ事務所での見習いの時期であった。

2) エリオット (1859-1897, 図-6)^{13, 14)}

ハーバード大学の学長となった同名の父親 (Charles W. Eliot) を持つエリオットは、サージェントと同様、ボストンの名家の出身であった。学生時代に現在のアケディア国立公園 (Acadia National Park) を訪れ、その環境を保全するために土地の購入を働きかけるほどの自然愛好家だった。1882年にハーバード大学を卒業後、数ヶ月間の園芸教育を受けてから、建築家の叔父 (Robert S. Peabody) の紹介でオルムステッドの事務所で働くことになった。ここで修業を積んでから一旦独立したが、コッドマンが急死した際には、オルムステッドの事務所の実務をも引き受けた。

エリオットの最初の大きな貢献は公園というものを地域レベルで位置付けたことであろう。すなわち、オルムステッドがボストンの中心であるボストンコモン (Boston Common) からアーノルド樹木園を経てフランクリンパーク (Franklin Park) に至るエメラルドネックレスと呼ばれる都市の公園緑地システムを造り出したのに対して、彼は環境の保全という視点から次第に希少となってきた都市周辺の樹林を含む空間をマサチューセッツ州という一層広大な地域の中の緑地システムとして位置付けて保全をはかった (図-7)。

その実現のため、エリオットはまず "Trustees of Public Reservations" とよばれる公有地の管理委員会の設立に奔走した。その設立の提案が最初になされたのが "Garden and Forest" 誌上であった^{15, 16), 17)}。具体的には、ボストンの広大な公園用地を購入する "Metropolitan Park Commission" の設立に加えて、このニューイングランド地方の残存する天然林を人々の利用と楽しみのために無税で管理する市民の組織づくりを提案した。彼の提案が雑誌に掲載されてから15ヶ月後の1890年には、この組織が立法化されている。ここに彼の行動力の一端がうかがえる。なお、この制度が1895年のイギリスのナショナルトラストの設立に影響を及ぼしていることを忘れてはならない。さらに1892年には "Metropolitan Park Commission" が発足した。翌年に、エリオットはこの委員会に保全選定地域を含むレポートを提出している。

彼は、専門職としての造園家の社会的認識を目指した記事も何度か雑誌に書いている^{18, 19)}。このように造園というものを金持ちの道楽や個人の家の修景から社会へ概念を拡大したことに加えて、公園の中にウィルダネス的な要素、すなわち、森林をもちこんだのもエリオットであった。1897年1月に掲載された論説²⁰⁾の中で保全された森林の風致施業 (Landscape Forestry) を提案している。その中で、保全された森林といえども人間が手を加えることが必要であると述べている。そして、これが雑誌での彼の最後の論説となった。彼の活躍をオルムステッドも期待してい



図-6 チャールズ・エリオット

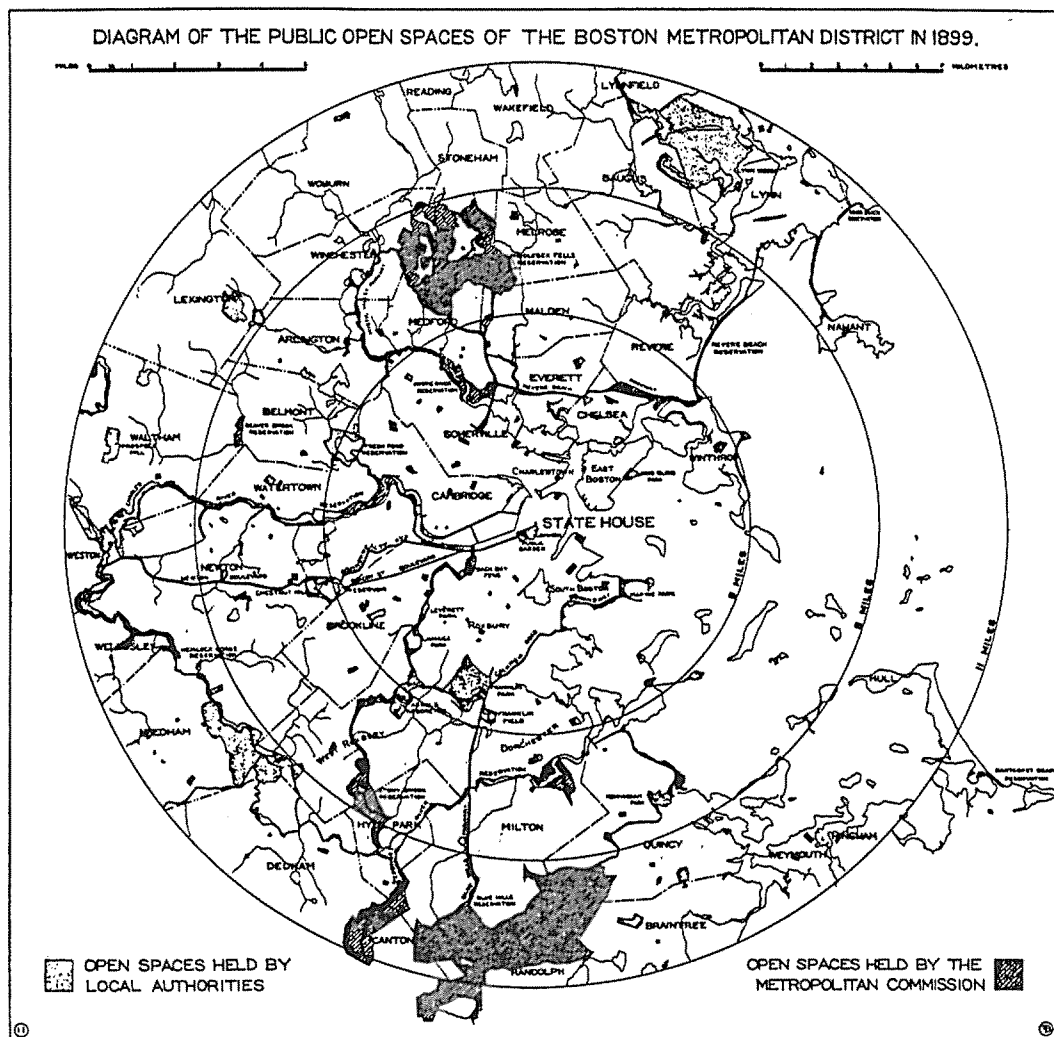


図-7 ボストンの広域緑地計画 (1899)

たのにも関わらず、同年3月25日にエリオットは37歳でこの世を去った。

彼の父親は、同様に建築家志望の息子を失った大富豪ロビンソン (Nelson Robinson) の寄付によって、1900年にハーバード大学に建築と造園のデザイン学部を設立した。このアメリカで初めての造園教育カリキュラムの作成には、オルムステッドの息子 (Frederick Law Olmsted, Jr.) が当たった。

3) ファーノウ (1851-1923)^{21, 22, 23)}

ファーノウは1851年1月7日にプロシアに生まれた。その森林アカデミーを卒業後、プロシアの森林局で経験を積んでから、1876年にアメリカに移住した。しばらく企業の森林経営に参画してから、1882年からのアメリカ林業会議 (American Forestry Congress) を組織する際に手腕を発揮した。その間、1885年のアディロンダックの森林の保全にサージェントやオルムステッド

とともに貢献した。1886年には連邦政府に設けられた林業部門の主任（Chief of Division of Forestry）として採用され、アメリカの林業運動の中心的役割を果たし、1891年の保護林の制定に関してはその法案の起草までこなした。また、オルムステッドも関わった1893年のシカゴの世界博覧会では林業館の展示に精力的に取り組み、林業への支持を求めた。1898年にはピンショールを後継者として主任の職を辞してから、コーネル大学でアメリカで最初の大学レベルでの4年制の林業教育を開始した。

彼は林業、林学に関して約250編の論文と2冊の本を残し、林業専門誌の発刊にも関わっている。“Garden and Forest”誌にも頻繁に投稿し、森林の施業法、樹木の取り扱い方、森林法、ドイツ林業の紹介など多岐な分野にわたって解説している。彼は森林の更新と恒続生産をアメリカで最初となえ、林業は経済的に現実的であるとした。また、今日の都市林に相当するものの取り扱いを述べた“The Care of Trees in Lawn, Street and Park”という本を1910年に著している。さらに、林産研究の必要性を訴え1909年にウィスコンシン大学キャンパス内の森林局森林生産物研究所（Forest Products Laboratory）の設立にも貢献した。1923年2月6日にこの世を去るまで、森林を総合的に捉え、出版、政策、教育、研究を媒介として森林の保全思想を普及させることに貢献した。

4) ピンショール (1865-1946)²⁰⁾ と シェンク (1868-1955, 図-8)²⁰⁾

ファーノウの跡を受け継ぎアメリカの国有林の保全に大きな影響を与えたピンショールがヨーロッパ滞在中に書いた林業に関する初めての論文が掲載されたのが“Garden and Forest”誌であった。その後、彼は10回ほど投稿している。これらの論文が縁になったと思われるが、彼はサージェントが委員長に任命された前述した森林委員会の最年少の委員に選ばれている。このことが関係してか、彼はこの雑誌を高く評価し、当時としては林業に関しての一番のものであったと述べている。

シェンクもファーノウと同様プロシア生まれで、ビルトモアの森林の管理をピンショールから引き継いだだけではなく、アメリカ初の林業学校を組織し、林業の専門家を育成した。彼のアメリカで初めての論文“Private Forestry and State Forestry”が4回に渡って掲載されたのもこの雑誌であった。しかし、彼がこれらの論文を投稿したのは“Garden and Forest”が廃刊される年であった。

5) スタイルズ (1837-1897)

教育者などを経て、ジャーナリストになった彼は林業や造園の専門家ではないが、その社会的重要性を誰よりも痛感していた。彼は署名入りの記事は全く残してはいないものの、この雑誌の編集者として毎週のように論説を担当していただけではなく、実質的にこの雑誌のすべてを取りしきっていた。週刊誌としてこれほど質の高い出版を10年間にわたって

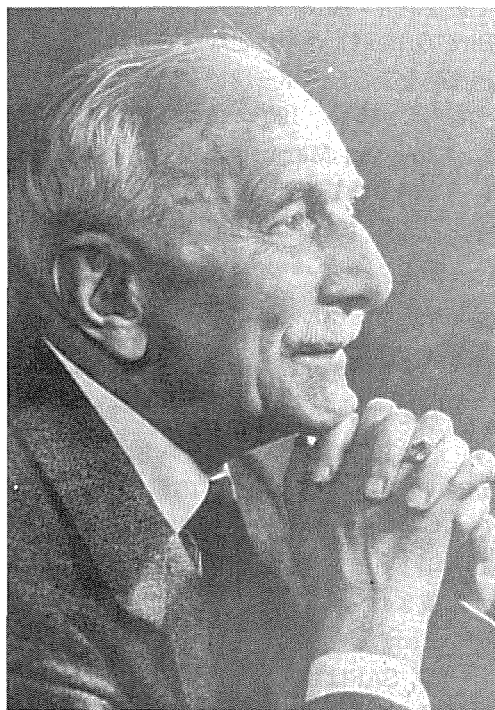


図-8 カール・シェンク (1951)

推進した編集者としての能力もさることながら、これを媒介として社会改革を進めようとした姿勢が重要である。彼がこの雑誌を通じて訴えたかったのは、個々の植物や庭の紹介ではなく、環境の保全とその社会的認識であったことが感じられる。植物等の専門家ではなかったからこそ、分野にとらわれない視点で将来を展望し、世論に訴えることができたのであろう。

具体的にはニューヨーク州のナイアガラの滝やアディロンダック山の環境問題、ヨセミテやイエローストーン国立公園の管理の問題をとりあげた。さらに、セントラルパークへの建築物侵入阻止と、そこでの博覧会開催中止運動を展開し、オルムステッドのデザインを擁護した。サージェントの関心が植物に限られ、植物の解説記事だけを執筆していたのに対して、彼はオルムステッドと同様、造園を社会改革のため生かそうとしていた。このように彼がこの雑誌の刊行の中心人物であったがゆえに、1897年10月6日の彼の死とともに、雑誌も廃刊になった。そして、彼の名前が "Garden and Forest" 誌上に登場したのは、彼の哀悼記事が最初で最後となった。

5. "Garden and Forest" の役割とその意義 ^{26, 27, 28)}

初めに、同時代の森林関係の雑誌の発行を辿ってみよう。1882年にアメリカ林業会議が開催されるようになり、その議事録の出版が "Garden and Forest" の発刊前年まで続いた。さらに、1895年に図版を持つ唯一の全国規模の林業誌として "The Forester" が発刊された。この雑誌は4回も名前を変更し、1931年に今日まで続くAFA (American Forestry Association) の機関誌 "American Forests" となった。さらに "Garden and Forest" の廃刊後の1902年には、ファーノウと彼が教えていたコーネル大学の同窓生によって "The Forestry Quarterly" が発刊され、これも1918年に改名され今日のSAF (Society of American Foresters) の機関誌 "Journal of Forestry" となっている。

アウトドア関係の関連雑誌の刊行を調べてみると、一番古いものは1873年にグリーンネル (George Bird Grinnel) が中心となって発刊した "Forest and Stream" があげられる。これは狩猟や溪流釣を楽しむスポーツマンのための雑誌であるが、その記事には水源涵養など森林の保全に関するものが多い。1903年には今日の "Field and Stream" に吸収されている。さらに1887年には "Audubon Magazine" が発刊されている。1888年には廃刊となるが、今日の "Audubon" に受け継がれていると考えられる。さらに、1889年には "Outdoor Life" , 1893年には登山を中心とした "Sierra Club Bulletin" が発刊されている。

このように "Garden and Forest" と相前後して森林や環境問題を扱ったさまざまな雑誌が発刊されている。しかし、その中でも "Garden and Forest" は極めて質が高く、その内容が多岐に渡っていることが特色と言える。これはその協力者の中に当時のオピニオンリーダーとしての社会的影響力が大きな人々が含まれていたからであろう。

さらに注目すべきことは2つの専門家の組織がその廃刊の直後に結成されている点である。まず、造園家の組織作りはオルムステッドの弟子の一人であるマニング (Warren H. Manning) が1896年冬からエリオットの協力を得て進めた。1897年の夏にはまず "American Park and Outdoor Association" が結成された。しかし、その頃にはエリオットは他界していた。さらに、1899年1月4日に11人を発起人とするASLA (American Society of Landscape Architects) が結成され、オルムステッドが引退してから事務所を引き継いだチャールズ (John Charles Olmsted) が初代会長となった。残念ながら会誌の発行は1910年まで待たねばならなかった。

一方、SAFは1900年11月30日にピンショーが中心となって結成された。その機関誌的なものとしては、ファーノウがコーネル大学時代に学生の協力によって1902年に発刊した "Forestry

Quarterly”がその役割を果たすようになった。なお、SAFが専門家を中心とする組織であるのに対して、1875年に結成されたAFAは一般の人々も含んだ組織である。

6. ま と め

雑誌 “Garden and Forest” はアメリカの環境認識およびその反映としての政策が大きく変化した時代に10年間に渡って刊行され、質の高い情報を提供した。この雑誌は購読者が限定されていた可能性があるが、彼らは雑誌から発信された情報を社会に反映できる立場の人達であった。また、この雑誌が読者の投稿を歓迎し、その意見がすぐに印刷される週刊であったため、環境保全の推進者たちがこの中で議論を戦わせたり、自らの考えを発展させていくことが可能になった。その過程で造園は単なる個別的な庭や公園を造る技術から、自然環境と人間社会の調和を目指す地域レベルの視点を形成していった。一方、林業も木材を収奪するという技術から、育林や環境保全へと展開していった。1897年に関係者の死が続いたことによって廃刊されたのは残念だが、その危機感とその後の組織作りや、造園教育の開始に影響をおよぼしたと思われる。

環境保全の分野に対する当時の人々の支持を得ることは困難であったことが想像されるが、今日のように園芸、林業、造園というような専門の分化が進んでいなかったのもむしろ専門の違いにこだわらない広い視野に立った協力体制が作りやすかったとも言える。サージェントが造園家から樹木学者になり、オルムステッドも科学的農業から造園を確立したことからわかるように、お互いに相手がやっていることを容易に理解できる立場にあった。さらに、誌上で頻繁に掲載記事に対する反対意見が表明されていることから、分野の縄張り意識にとらわれないで健全な議論を促し、環境保全運動の発展に貢献した。この点、あまりにも細分化された今日の日本の森林や公園行政、教育などの縦割り構造の弊害と照らし合えると考えさせられる点が多い。

引 用 ・ 参 考 文 献

- 1) 伊藤太一: アメリカ合州国における林業と環境保全運動 (1), 京大演報, 61, 236~246, 1989
- 2) DAVIS, Richard C., ed.: Encyclopedia of American Forest and Conservation History. Macmillan Publishing Company, New York, p.589, 1983
- 3) GRAHAM, Frank, Jr.: The Adirondack Park, Syracuse University Press, 1978
- 4) THOMPSON, Roger C.: Politics in the Wilderness, New York's Adirondack Forest Preserve, Forest History, 6 (4), pp.14~23, 1963
- 5) ホイットル, T.: プラントハンター物語, 八坂書房, 東京, pp.153, 1983
- 6) ZAITZEVSKY, Cynthia: Frederick Law Olmsted and the Boston Park System, The Belknap Press of Harvard University Press, Cambridge, MA, pp.58~64, 1982
- 7) ROPER, Laura Wood: FLO, A Bibliography of Frederick Law Olmsted, The Johns Hopkins University Press, Baltimore, pp.404~405, 1973
- 8) Garden and Forest Publishing Co.: Garden and Forest, 10, p.514, 1897.
- 9) Ed.: William A. Stiles, Garden and Forest, 10, pp.399~400, 1897.
- 10) OLMSTED, F.L.: Foreign Plants and American Scenery, Garden and Forest, 1, pp.418~419, 1888
- 11) RENSSLAER, Mrs. Mariana G. Van : The Art of Gardening-An Historical Sketch 1, Garden and Forest, 2, pp.134~135, 1889 (19回まで続く)
- 12) OLMSTED, J.C.: The Treatment of Slopes and Banks, Garden and Forest, 1, p.326, 1888
- 13) NEWTON, Norman T.: Design on the Land, the Development of Landscape Architecture, The Belknap Press of Harvard Press, Cambridge, pp.318-336, 1971
- 14) HUTH, Hans: Nature and American, Three Century of Changing Attitudes. University of Nebraska Press, Lincoln, p.119, 1957
- 15) ELIOT, C.: The Waverly Oaks, Garden and Forest, 3, p.85, 1890

- 16) ELIOT, C.: How to Save the Waverly Oaks, *Garden and Forest*, 3, pp.109~110, 1890
- 17) ELIOT, C.: The Waverly Oaks, *Garden and Forest*, 3, p.117, 1890
- 18) ELIOT, C.: When to Employ the Landscape Gardener, *Garden and Forest*, 2, p.71, 1889
- 19) ELIOT, C.: The Landscape Gardener, *Garden and Forest*, 2, p.74, 1889
- 20) ELIOT, C.: Trees in Pubulic Parks, *Garden and Forest*, 10, p.37, 1897
- 21) TWIGHT, Ben W.: Bernhard Fernow and Prussian Forestry in America, *Journal of Forestry*, 88 (2) , pp.21~26, 1990.
- 22) *Journal of Forestry*, 21 (4) , pp.305~348, 1923 (Fernow追悼号)
- 23) DAVIS, *ibid.*, pp.168~169.
- 24) PINCHOT, Gifford: *Breaking New Ground*. Island Press, Washington, D.C., 1987 (Originally Published in 1947)
- 25) SCHENK, Carl Alwin: *Birth of Forestry in America*, Forest History Society, CA, 1955
- 26) WILLIAMS, Michael: *Americans & Their Forests*, Cambridge University Press, Cambridge, MA, 1989
- 27) REIGER, John F.: *American Sportsmen and the Origins of Conservation*, Revised Edition. University of Oklahoma Press, Norman. pp.73~79, 1986
- 28) DAVIS, *ibid.*, pp.192~193, pp.283~284
- 29) FABOS, Julius Gy et al.: *Frederick Law Olmsted, Sr.*, The University of Massachusetts Press, MA, 1968
- 30) ELIOT, Charles William: *Charles Eliot, Landscape Architect*, Houghton Mifflin, MA, 1902

SUMMARY

The last decade of the 19th century was an era of environmental awareness brought by urban problems and the destruction of forests in the United States as symbolized by Frontier theory by Jackson Turner. At the beginning of such period, a weekly magazine titled "Garden and Forest" was inaugurated in early 1888. This magazine, conducted by Charles S. Sargent of the Arnold Arboretum, was commercially not very successful, but the contributors were given opportunities to express new ideas and to discuss them freely. Among them were leaders of new professions called forestry and landscape architecture.

Frederick Law Olmsted, co-founder of this magazine, could not write to this magazine because he was occupied with many landscaping projects in spite of his age. However, his successors like Eliot, Codman and his step son Charles contributed more often and tried hard to establish their new profession in the society and expanded the field of landscape architecture from park maker to the regional planner. On the other hand, foresters like Fernow, Pinchot and Schenk also took advantage of contributing to this magazine.

Death of Stiles, an extremely capable and eloquent editor of this magazine, following Eliot, put an end to this magazine in December 1897. However, during that decade, both forestry and landscape architecture had solidified their base. In 1899, American Society of Landscape Architects was organized, and it was followed by establishment of first landscape architecture curriculum in the United States at Harvard. At the same time, Society of American Foresters was organized, and national forest system began rapid expansion for conservation.